

2020年2月23日（日）「惨めさを知る——救いを知る」

ハイデルベルク信仰問答より

問3 あなたは、どこで、あなたの罪とその悲惨な結果を知っていますか。

答え 神の律法からです（ローマ 3:20）。

ローマ 7:14-25

14 私たちは、律法が霊的なものであることを知っています。しかし、私は罪ある人間であり、売られて罪の下にある者です。15 私には、自分のしていることがわかりません。私は自分がしたいと思うことをしているのではなく、自分が憎むことを行っているからです。16 もし自分のしたくないことをしているとすれば、律法は良いものであることを認めているわけです。17 ですから、それを行っているのは、もはや私ではなく、私のうちに住みついている罪なのです。18 私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています。私には善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行することがないからです。19 私は、自分でしたいと思う善を行わないで、かえって、したくない悪を行っています。20 もし私が自分でしたくないことをしているのであれば、それを行っているのは、もはや私ではなくて、私のうちに住む罪です。21 そういうわけで、私は、善をしたいと願っているのですが、その私に悪が宿っているという原理を見いだすのです。22 すなわち、私は、内なる人としては、神の律法を喜んでいるのに、23 私のからだの中には異なった律法があって、それが私の心の律法に対して戦いをいどみ、私を、からだの中にある罪の律法のとりこにしているのを見いだすのです。24 私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。25 私たちの主イエス・キリストのゆえに、ただ神に感謝します。ですから、この私は、心では神の律法に仕え、肉では罪の律法に仕えているのです。

昨年の10月から祈禱会で『ハイデルベルク信仰問答』を学び始めましたが、そこでは一回につき基本的に一つの問いを扱うようにしております（そうでないこともあります）。まず問答そのものを読み、参加者の皆様と一緒に解説書を輪読する。少し補足をした後に皆様からのコメントをいただく。そのような形で学びを続けております。ただ、それでも十分な理解が得られたとは言えませんので、私の中で改めて学び直し、説教にすることで、教会の皆様にもお分かちできるよう努めております。毎月ではありませんが、テーマ説教の中で取り上げさせていただきます。

問3 あなたは、どこで、あなたの罪とその悲惨な結果を知っていますか。

答え 神の律法からです（ローマ 3:20）。

問3は問2の内容を受けていまして、問2では「キリスト教の知識（救いの順序）」が三つにまとめられていました。

①悲惨 ②救い ③感謝

教会の門を叩かれる方の多くは、何らかの問題を抱えておられることが多いでしょう。心の拠り所を求めておられたり、金銭的な必要があったり、健康上の問題と戦っておられたり、様々です。反対に、特に問題を感じながら生きているわけではないけれど、教会のイベントや活動を通して集われるようになったというケースもあります。クリスチャンホームで生まれ育った子どもの場合、生まれたときから教会生活が伴っており、そこに居ること自体に何の疑いも抱かないかもしれません。その場合、救いのメッセージをずっと聞いていても魂の底まではなかなか届きにくいこともあります（私自身がそうでした）。いずれにしても、聖書はすべての人に「悲惨」を教えようとしているのです。これは「罪」と呼んでもよいのですが、敢えて「悲惨」という表現を用いるとき、ここで言われていることの意味が捉えやすくなるでしょう。

「悲惨」と訳された言葉は、原文では「Elend（エーレント）」というドイツ語の単語で、「惨め、悲惨、哀れ、窮状、貧困、不幸」などと訳され得るようです。この中でも「惨め」という表現は共感を覚えやすい。「あなたは罪人です」と言われても何のこともピンとこないかもしれませんが、「惨め」と言われれば誰にでも惨めになった経験はあるはずですから、割と理解できる話になってくる。

私たちはどんなときに「惨めさ」を感じるのでしょうか。私は自分の様々な経験を振り返ってみましたが、真っ先に思い浮かんだのは、ピアノ演奏が思うようにいかなかったときのあの感覚です。楽器をなさっている方ならよく分かると思いますが、せっかく練習を重ねてきても、心の備えが十分にできていなかったり、本番前や本番中に心乱される事件が起きて集中力が吹っ飛んでしまったり、緊張して指が思うように動かなかったり、頭が真っ白になってしまったり…。演奏というものはまことに繊細な営みであり、演奏者なら誰もが悔しい経験をするものだと思います。失敗した後は惨めな気持ちになる。

しかし、楽器の演奏における「惨めさ」は、その人の存在を脅かすほど大きなものではありません。もっと根源的な「惨めさ」がある。それは、自己分裂と言いますか、自分が本来生きたいように生きられない、語った通りに行動できない、そういったことを自覚するときの「惨めさ」です。例として、同じ人間でありながら、場所が変わると別人のように振る舞ってしまうというケースがあります。家の内と外とでは性格がまるで

違っていたり、普段は穏やかな人なのに運転をすると豹変したり、相手によってコロコロと態度が変わってしまう人もいるでしょう。あるいは、見栄を張って嘘をつくこともそれに当たる。これは一種の「自己分裂」であって、一貫した生き方ができない、人間の弱さを表しています。そのような自分に気づくとき、人は惨めになる。ペテロのように、自信に満ちた信仰告白をしながら、敵地では恐れに取り憑かれて告白した通りに生きられないこともあります。目覚めているときは柔和な人が、夢では殺人鬼のような心を持つ自分と出会うこともある。例を挙げればきりがありませんが、人間にはどこか統一を欠く部分があるのです。これを「惨めさ」「悲惨」と呼ぶことにいたします。

今日はローマ 7:14-25 のパウロの言葉を並べました。なぜなら、パウロ自身がこの箇所の中で、彼自身が抱える「分裂」の問題に苦しんでいるからです。

**私には、自分のしていることがわかりません。私は自分がしたいと思うことをしているのではなく、自分が憎むことを行っているからです。(7:15)**

パウロはキリスト者となり、自分の中に潜む「分裂」に目が開かれました。具体的に彼のどのような部分を指して言っているのかはわかりませんが、彼は「こう生きなくてはならない」「こう生きたい」と願いながら、実際にはそれと程遠い状態にある自分に気づいたのです。おそらく、外面的な行動のうえでは、彼は非の打ち所のない生き方をしていたでしょう。しかし、心の思いがそれに伴っていない自分を認めないわけにはいかなかった。

このことをもう少し分かりやすくお話しします。私たちは誰かに対して怒ることがあると思います。二度と会いたくないという感情にさえ囚われる。あるいは、憎しみが強いとき、殺してやりたいと思うことさえあるでしょう。しかし、私たちはその思いを露わにして生きてはいません。その相手と顔を合わせるときは、どうにか平静を装っている場合が多い。本当はその相手を許せたら楽になるのに、それが難しいのです。表面上は許しているように、気にしていないように振る舞う。しかし、実際にはそれができていない。こういうところで人間は煩悶苦闘はんもんくとうするのです。では、私たちの心を苦しめているものとは何でしょう。それは、神の律法であるとパウロは語ります。

**もし自分のしたくないことをしているとすれば、律法は良いものであることを認めているわけです。(7:16)**

神の律法は、人間の真に正しい生き方を教えています。人はこのように生きれば幸せになれるという道が描かれている。十戒では、人と人との関係（第5～10戒）において、両親を敬え、殺すな、姦淫するな、盗むな、嘘をつくな、人のものを欲しがると言われている。それらは正しいことであるということは理解できる。表向きはそのように生

きてきたかもしれない。しかし、その律法の本質——心においてさえ正しくあるようにと言われると（主イエスはそのように教えた）、それができない自分を知るようになるのです。「殺すな」という教えは、心の中でさえ怒りを燃やすなという意味だと言われる。「姦淫するな」とは、情欲をもって異性を見るなという意味だと教えられる。この神の基準の高さを知るときに、程遠いところにいる自分に気づくのです。

パウロという人は、キリスト者となる前に律法を知らなかったわけではありません。パリサイ人として、誰よりもその道を極め、厳格に守って生きようとしていた。表向きは責められるところがないほどであった。しかし、イエス・キリストの福音に出会ってから、それまでの生き方でもってしても、神の基準からは遠く離れている自分を見出すようになったのです。

ですから、それを行っているのは、もはや私ではなく、私のうちに住みついている罪なのです。私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています。私には善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行することがないからです。私は、自分でしたいと思う善を行わないで、かえって、したくない悪を行っています。もし私が自分でしたくないことをしているのであれば、それを行っているのは、もはや私ではなくて、私のうちに住む罪です。そういうわけで、私は、善をしたいと願っているのですが、その私に悪が宿っているという原理を見いだすのです。すなわち、私は、内なる人としては、神の律法を喜んでいるのに、私のからだの中には異なった律法があって、それが私の心の律法に対して戦いをいどみ、私を、からだの中にある罪の律法のとりこにしているのを見いだすのです。私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。（7:17-24）

パウロは神の基準を知れば知るほど、それに逆らおうとするもう一人の自分がいることに気づいたのです。子どもにも分かるように言いますと、親は子どもに対して、ゲームやYouTube、あるいはSNSの時間を制限します。それは、子どもの脳の発達を考えてのことであったり、幼いうちから電子媒体に依存していくことを避けるためであったり、トラブルから守るためであったり、基本的に子どものためを思って言っている。子どもも親と一緒に決めた決まり事に従うのは正しいということを大体は理解しているはずですが、自分の内側には、もっともっと娯楽にのめり込みたい願望があるのです。これはもちろん大人にも言えることで、目を向けるべきではない世の誘惑についつい目が行ってしまう、一時の欲望に負けるという形で現れているのではないのでしょうか。そのとき、何か本来あるべき場所から転がり落ちていくような感覚を覚える。パウロは、これを「悪が宿っているという原理」だと言います。人間が生まれつき持っている「原罪」のことです。

しかし、ある人は言うでしょう。そんな罪意識に苦しむのであれば、基準など持たなければよいと。確かに、基準がなければ罪に定めるもの自体が存在しないということになります。ですが、絶対的な基準を欠いた世界があらゆる破壊をもたらしてきたことは、人類史が証明しているでしょう。神なしの世界が形成される時、憎しみにも情欲にも歯止めがかからなくなる。ここに、更に深刻な「悲惨」が存在します。慄きの欠如。すなわち、自分の問題に気づかないことこそが、人間の根源的な悲惨なのです。「宗教の現実とは、人間が自分自身に戦慄することである」(カール・バルト)。自分が病んでいて、本来あるべき「統一」が欠落しているという事実には、聖書は気づかせようとしているのです。

私は嘘をつく自分に気づいて、愕然としたことがあります。若かった頃は無意味な見栄を張ることをやめられなかったのです。自分の実力以上のことを言ったり、知らないことを知っているかのように誤魔化したり。そういう偽りに気づいたとき、惨めになります。自分はどうしてこのようになってしまったのだろう…と自分を責めないではいられなくなる。ところが、パウロは人が自分の惨めさに気づいたときにこそ、神の救いが介入すると言うのです。

**私たちの主イエス・キリストのゆえに、ただ神に感謝します。(7:25a)**

神は私たちに「惨めさ」を教えてください。これは、聖書の御言葉を通してしか分かり得ないものです。そして、それが分かった瞬間に私たちは救われている。ところが、救われて神の御心が分かってくると、ますます自分が深刻な「惨めさ」を抱えていることを知るようになる。同時に、そこから救い出してくださいと神の恵みの深さも知るようになるのです。

## 【結論】

キリスト教がまず私たちに教えてくるのは、「悲惨」「惨めさ」というものです。これは決して耳障りのいい内容ではありません。自分の現実を突きつけられるからです。今まで見たこともなかった自分に気づかされる。これは一面辛いことのようにですが、まったく同時に幸いを身に受けるのです。悲惨が分かると救いが分かる。神の恵みの大きさが分かる。パウロの苦悶は、彼が如何に自分の問題の深さを知っていたかを表していますし、同時に彼がどれほど神の恵みの大きさを知っていたかをも描いています。自分の心を深く掘れば掘るほど、そこに埋まっている恵みの宝をも見出していくのです。

## 【祈り】

完全なる統一体であられる神よ。あなたの内には分裂が存在しません。三位一体の神でありながら、一糸乱れぬ調和を有する方です。そのようなお方に造られたはずの私たちの内に、分裂が存在します。そのことにさえ気づかずに歩んでおります。聖書を通して、人間の真の姿が教えられました。私たちはそれによって自分を知りました。それは辛いことでもあり、幸いを受けることでもあります。なぜなら、そこに救いが並べられているからです。救い主イエス・キリストのゆえに感謝いたします。

## 【祝祷】

仰ぎ願わくは、  
万物を「善きもの」として創造し、ご自身の統一と栄光とを世に現し給うた、父なる神の愛、  
惨めさを知り、自己の内なる分裂に気づく者に、直ちに救いの御手を差し伸べ給う、主イエス・キリストの恵み、  
救われた者の人格を修復し、キリストに似た者へと造り変え給う、聖霊の親しき交わりが、  
我ら一同と共に、とこしえにあらんことを。